

令和三年度 推薦入学試験問題

国語

◎ 指示があるまで開かないこと

北海道社会事業協会 帯広看護専門学校







いに決まっている。それが生命の原理だ。現代に生きているとき、生のなかに死を見いだすこと、それが古典というもののいいところかもしれない。時代を生きていないということも、大事なことなのだから。

それに、文化というものの現代での繁栄のしかたは、ときにはキミが悪くなる。文化の一つの形である、民族だの国家だのというのが、このごろは少し繁栄しすぎている。民族だって国家だって、もうちょっと簡単に滅びたほうがいい。その滅びの歌は、古典として死者のアルバムにカザ<sup>f</sup>っておけばよい。

というわけで、<sup>4</sup>ぼくはこのところ、この時代を生きていることに、いくらかうんざりしている。それでも人間は、その時代を生きたことしかできないものだ。文化的に時代に拘束されながら。D、うんざりしながら時代と寝ることにしている。

時代という浮気女は、その時代と寝る男たちを裏切り、彼らを埋葬するだろうが、それが生命というものだ。裏切りを恐れて反時代的になってもしかたがない。

でも、文化だの伝統だのといったものが、偶然のはかない糸でしかつながっていかぬことぐらいは覚悟しておこう。文化は連続しているかという問いは、生命は連続しているかという問いに似ている。そこで血縁幻想はうとうしい。それに、この地球の生命にとって、人間なんてほんの一部分で、ましてその文化なんてどうということない。にもかかわらずぼくは、この時代の文化によりかかって生きている。

(森毅『考えすぎないほうがうまくいく』)

設問一 傍線部アからエの漢字を平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二 傍線部aからfの片仮名(カタカナ)を漢字に書き換えなさい。

設問三 A へ D には、どんな接続詞(つなぎことば)が入るか。次の中から最も適当と思われる語を選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ語は二度以上使わないこと。

ア むしろ イ それで ウ しかも エ だから

設問四 傍線①「衰退」と熟語の構成が同じものはどれか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 保養 イ 最高 ウ 急病 エ 開閉

設問五 傍線②「偶然」の対義(反対の意味を表す)となる二字の熟語を書きなさい。

設問六 傍線(1)「文化としての枠ができてしまうと、あとはその枠のなかでことが進行する」とあるが、このような文化を、筆者は何と表現しているか。最も適当と思われるものを、本文中から十字以上、十五字以内で書き抜きなさい。

設問七 傍線(2)「このことは、文化的伝統というものについて、いくらか逆説的な状況を語っている」とは、具体的にどういうことか。本文中の語句を用いて四十字以内で説明しなさい。

設問八 傍線(3)「机の奥から出てきた、おじいさんの古い写真」は何の比喩か。最も適当と思われるものを、本文中から二字の熟語で書き抜きなさい。

設問九 傍線(4)「ぼくはこのところ、この時代を生きていることに、いくらかうんざりしている」のはなぜか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、かつてのようによいものを生産できない現代文化は、きつと長続きしないだろうと、悲観的になっているから。

イ 筆者は、現代の文化はちょっとオタクの世界のようだと感じていて、あまり面白いものではなくなくなっているから。

ウ 筆者は、壮年になってもう成長することもなくなり、自分の手で新しい文化を生み出そうとする意欲を持ってなくなったから。

エ 筆者は、人間が時代とともに生きることしかできないにも関わらず、時代が裏切ることを知っているから。



## 問題二

自分のことは自分の力で見つけ出さなければ気が済まないという負けず嫌いのメンタリテイは、自尊心の高さも言えるし、また、それがうまく運ばば、人にはまねのできない技術が生まれることもあるだろう。

けれども、ときにはどうかと思われることもある。孔子の「わたしはあるとき三日三晩寝ないで考えつづけたが、<sup>(1)</sup>なにも得ることはなかった。本を読んで学ぶにまざることはない」という言葉がある(『論語』)。まして、大学に入った学生は、いろいろなことをキユウシユウし、学ばなければならない。A なかには「自分は人から影響を受けたくないので本は読まない」という学生がいる。言われたこちらは愕然とするしかない。

負けず嫌いがさらに高<sup>ア</sup>じると、人と話しているとき、なにかと自分の知識や意見をひけらかすタイプがうまれる。常に自分が相手より優れていることを確認しなければ気が済まないのだろう。

I 「というメンタリテイにとって支えになるのは、デカルトの考え方である。

デカルトによれば、目に見えるもの、耳に聞こえるものなど、どれも疑おうとすれば疑えるが、わたしが考えているというものを疑うことはできないのであった。疑っているのも自分自身だからだ。B わたしが存在することは確かだが、それもひとえにわたしが考えているからだ、というわけである。

負けず嫌いのメンタリテイは、自分が生まれ育った場所よりも少しでも上を目指し、すこしでも自分の位置を高めなければ気が済まないという「II」を伴うことがある。それについて\*西研は非常にうがったことを述べた(『大人のための哲学授業』)。いわゆる、地方に生まれ、封建的な土地柄で育った者は、少しでも成績をあげて中央の大学に進み、都会で就職しようとする。それによって封建的な故郷とは違う世界にできることがあるからだ。このように少しでも上のステージにあがろうとする人にとって「III」はどこか遠い場所にいることになるだろう。その背景には十九世紀以来の近代化、都市化、ヨーロッパ中心主義がある。中央で満足できない者は欧米に行くのである。

この考えは、近代哲学の上昇志向とも相即している。

その代表的なものがドイツ観念論を代表する十九世紀の哲学者ヴィルヘルム・ヘーゲル(一七七〇—一八三一)の「弁証法」だ。弁証法とは、他者との出会いによって、それまでの自分には想像もつかなかったより高次の次元へと上昇してゆくソウチでもある。

ヘーゲルによれば、自分一人の力で一人前の存在になれる者はだれもない。ひとは必ず、そうした自分を認めてくれる存在を必要とする。自分を慕ってくる子分やテシタ、部下のような存在、あるいは教え子や家族などに自分を崇め、尊敬してもらってはじめて、ひとは一廉の者としての自信をえる、というわけである。

ところが、このような状況は、じつは両刃の剣である。当初は、自分が優れているから、ひとが尊敬してくれるとわたしは思っている。だが、考えてみれば、自分が一廉の者としての自信を持てるのも、ひとえにだれかが自分を慕ってくれるからだ。自分あつての子分ではなく、自分あつての自分である。自分は一人前の存在だと思ってい<sup>d</sup>たら、じつは、子分にイゾンする存在だったのである。

本当に一人前になるためには、そのため、また別の道を考えなければならない。それは、他人によって認められても<sup>e</sup>らうまでもなく、自分で自分を律するストイックなあり方だ。けれども、このあり方も他人とマジわる<sup>e</sup>ことのできない寂しいあり方であり、長くは続かない。

ある状態(「正」「定立」)が達成できても、それが否定され(「反」「反対定立」)、より高次のレベル(「合」「綜合定立」)に進んでゆく運動を、ヘーゲルは「弁証法」と言う。弁証法とはけっしてC 上のD 論ではなく、人間誰もが巻き込まれているダイナミズムだ。

だが、そう考えると逆に、一つのあり方にコシツ<sup>f</sup>することのほうが不思議に思えてくる。



いずれにしても「自分は自分」という思いこみはあつけなく挫折する。

(貫成人『哲学ワンダーランド』 一部改変)

(註) \*西研 日本の哲学者。

設問一 傍線アからエの漢字を平仮名(ひらがな)に書き換えなさい。

設問二 傍線aからfの片仮名(カタカナ)を漢字に書き換えなさい。

設問三 A、Bには、どんな接続詞(つなぎことば)が入るか。次の中から最も適切と思われるものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア まして イ それゆえ ウ なお エ ところが

設問四 傍線①「うがったこと」はどのような意味か。次の中から最も適切と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 本来は、伏せておくべきだったこと

イ 物事の本質を捉えていること

ウ 多くの人が正しいと考えていること

エ 多分、そうではないかと予想されること

設問五 C、Dにそれぞれ漢字一字を補い、適切な言葉を完成させなさい。

設問六 傍線(1)「ときにはどうかと思われることもある」は、筆者の、何に対するどのような気持ちを述べたものか。次の中から最も適切と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア 「寝ないで考えつづけたが、なにも得るところがなかった」という孔子に、同情する気持ち。

イ 「本は読まない」という学生の、はき違えた自尊心を批判する気持ち。

ウ 知識や意見をひけらかすタイプであることを、反省したいという気持ち。

エ 少しでも上を目指すため、都会で就職しようとする者の、短絡的な考えをあざ笑う気持ち。

設問七 I、IIIにはそれぞれどんな語句が入るか。次の中から最も適切と思われるものの組み合わせを選び、記号で答えなさい。

ア I 自分は自分 III 自分自身

イ I 理想の自分 III 本当の自分

ウ I 自分は自分 III 本当の自分

エ I 自分自身 III 理想の自分

設問八 IIにはどんな語句が入るか。最も適切と思われるものを本文中から四字で書き抜きなさい。

設問九 傍線(2)「『自分は自分』という思いこみはあつけなく挫折する」のはなぜか。本文中の語句を用いて三十文字以内で説明しなさい。

設問十 本文の内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 負けず嫌いのメンタリティは、少しでも上を目指すために、つねに自分自身を疑っている。

イ 十九世紀以来の近代化、都市化、ヨーロッパ中心主義により、封建的な故郷を離れて都会で暮らしたいと考える者が増えた。

ウ 一人前の存在になるには、他人に認められようとするのではなく、自分で自分を律するストイックな生き方を続ける必要がある。

エ 他者との出会いによって、より高次のレベルに進んでゆく力は、あらゆる人を巻き込むものである。





